

# 石川県立美術館だより

平成15年5月1日発行 第235号

開館20周年記念

## 北野恒富展

金沢が生んだ美人画の巨匠



宝惠館 昭和6年頃 北野恒富  
(2ページ企画展示室 第7・9展示室)参照)

平成15年4月26日(土)~5月25日(日)

### 目次

開館20周年記念北野恒富展.....2	展覧会回顧 鳥と語る 詩魂の画家脇田和展) ...5
春の優品選(前田育徳会展示室).....3	美術館小史・余話(33).....5
春の優品選(第2展示室).....3	講演会記録(戦国武将と茶の湯).....6
鴨居 玲.....4	企画展示室、五月の行事案内他.....7
常設展示 主な展示作品.....4	所蔵品紹介、ミュージアムショップ通信...8

5月18日(日)は国際博物館の日です。

企画展示室(第7~9展示室)

開館20周年記念

北野恒富展

金沢が生んだ美人画の巨匠

4月26日(土)~5月25日(日) 会期中無休

主催/石川県立美術館

共催/北國新聞社

後援/財団法人日本美術院

企画協力/アートシステム



三味線 大正10年  
当館蔵

当美術館が昭和五十八年秋に開館してから、はや二十年が過ぎようとしています。その間、数多くの企画展を催してきました。古美術から近現代美術、また絵画や彫刻、工芸など様々な時代、ジャンルにおいて、郷土に縁のある内容のものを中心に取り上げました。開館二十周年を迎える本年は、春に近現代の純粹美術、秋には古美術、来年一月には近現代の工芸美術と、各分野において記念の展覧会を開催いたします。まず春に行うのが、この「北野恒富展 金沢が生んだ美人画の巨匠」です。

北野恒富(明治十三~昭和二十二年)は、金沢出身の日本画家で、艶麗な美人画で知られています。恒富は、十八歳で大阪に出、生涯その地で活動したこともあって、没後郷里では、その名を忘れられていったようです。しかし存命中は、たとえば明治四十四年に文展で『日照雨』が三等賞を得た時に、「新進作家として令名ある金沢出身の画伯」として地元の新報で取り上げられ注目されたり、また大正十三年金沢で結成された金城画壇にも、特別会員として参加し、郷土の画壇に刺激を与えてもいます。中でも「三味線」(図版参照)は、大正十年に日本美術院同人米国巡回展に出品され、その後金城画壇展に特別出品されたもので、「後進に現時の傾向を見せ、洗練された技巧を見せるには場中一二の作であろう」と評されました。

また、恒富は大阪に出るまでに、金沢や高岡で印刷物の版下を彫る彫刻に従事するかたわら、南宗画や光琳風の絵画を学んだといえます。加賀の地には江戸時代、俵屋宗達の工房の担い手、俵屋宗雪が訪れ制作を行うなど琳派と関わりがあり、また加賀藩では、すぐれた職人を他国から招き、伝統工芸技術を育成するなど、今日にみる加賀文化の基盤が形成されていきました。そうした郷土の美術文化の伝統が、後年華開く恒富芸術の造形感覚を養ったとも考えられます。

本展では、恒富の主要展覧会の出品作品を中心に、ポスターや素描、挿絵など資料もあわせて展示し、その業績を振り返るとともに、郷土が生んだ偉大な画家の存在を再認識していただくこととするものです。

主な出品作品

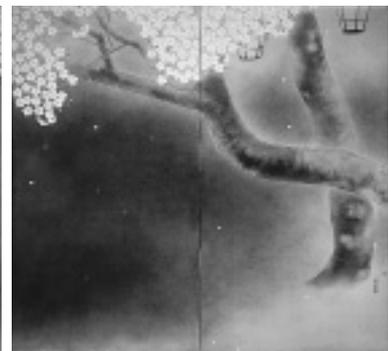
- 「摘草」 明治40年代/大阪市立近代美術館建設準備室蔵
  - 「浴後」 明治45・大正元年/京都市美術館蔵
  - 「道行」 大正2年頃/福富太郎コレクション/資料室蔵
  - 「願いの糸」 大正3年/木下美術館蔵
  - 「鏡の前」 大正4年/滋賀県立近代美術館蔵
  - 「淀君」 大正9年/耕三寺博物館蔵
  - 「宵宮の雨」 昭和3年/大阪市立美術館蔵
  - 「鷺娘」 昭和5年頃/足立美術館蔵
  - 「いとさんこいさん」 昭和11年/京都市美術館蔵
  - 「星(夕空)」 昭和14年/大阪市立美術館蔵
  - 「夜桜」 昭和18年/大阪市立美術館蔵
  - 「婦人(ポスター原画)」 昭和4年/高島屋史料館蔵
  - 「乱菊物語/谷崎潤一郎(挿絵)」 昭和5年頃/朝日新聞社蔵
- 所蔵者の都合により、会期中一部展示替えを行います。
- ・ 四月二十六日、五月十日に展示
  - ・ 五月十一日、二十五日に展示



涼み 大正15年・昭和元年  
大阪市立近代美術館建設準備室蔵



(左隻)



(右隻)

夜桜 昭和18年  
大阪市立美術館蔵

常設展示室(前田育徳会展示室)

特集

# 春の優品選

4月25日(金)~5月25日(日)後期

前号に引き続き、本特集で展示する作品を紹介します。

真鳥羽入 筥 清水九兵衛

清水九兵衛は五十嵐道甫と並んで、「加賀時絵」の祖として知られる人物です。三代藩主利常の時代に、江戸において加賀藩の御用を務めていました。

真鳥羽とは、鷺の羽を矢羽にしたもので、斑紋によって雪白・黒つ羽・本黒などの名称が付けられています。この筥はその真鳥羽を収めるものです。螺鈿で表された岩場に寄せる波を時絵で描いています。

宝入り石畳文様金欄(大徳寺金欄)・縞格子文様間道(弥兵衛間道)

名物裂とは、舶載された外来裂のうち、特に茶人や好事家に選ばれ「名物」として珍重された裂をいいます。金欄・緞子・間道などさまざまな種類の織物があります。

金欄とは、織金と呼ばれる箔糸で文様を織り出したものです。萌黄と金で石畳文を表し、宝尽くしと卍文と球点を織り出した「宝入り石畳文様金欄」は、大徳寺の帷に用いられたといわれることから「大徳寺金欄」とも称されます。

間道とは、絹または木綿の縞・格子織物のことをいいます。濃紺・小豆色・茶・白・縹色の縦縞に、白い横縞を通した「縞格子文様間道」は、宋に渡って織法を学んだ小松弥兵衛の名にちなみ「弥兵衛間道」と呼ばれます。

流錫馬等図 住吉廣長筆

流錫馬・笠懸・犬追物は、騎射の三ツ物として武士に愛好されました。流錫馬は馬を馳せながら鎗矢を射る弓技で、狩装束で競技を行うのが本義とされました。本図は、それら三ツ物を描いたもので、後期はうち「流錫馬図」を紹介します。筆者の住吉廣長は、大和絵住吉派の支流である板谷派の絵師です。画面には「慶意廣長筆」の署名と「廣長」の印があります。

色絵市松文平鉢 古九谷

前田育徳会に古九谷は二点しか残されていませんが、そのうちの二つです。市松模様を基調に、鳳凰と二重の正方形が配されています。ひとつひとつの正方形には、唐草・鮫小紋・七宝繋ぎ・紗綾形などが施されており、軽快さを与えています。

優品選後期の構成テーマは久隅守景です。昨年の「利家とまつ 加賀百万石物語」展でも取り上げたように、守景は加賀ゆかりの画家として知られ、また全国的に広く愛好されています。しかし守景の生涯については不明な点が多く、生没年も明らかではありません。判明していることは、徳川幕府の御用絵師として画壇の頂点にあった狩野探幽の門で頭角をあらわしますが、後にその門を離れ(一説には破門)たこと。加賀には少なくとも二度来ていること。最晩年は京都で過ごしたと考えられていること。漢画的な画風が年を追うに従って和様化してゆくことなどです。

守景の加賀での足跡は、まず富山県高岡市の瑞龍寺に描かれた「四季山水図襖」に見られます。この作品は加賀藩三代藩主前田利常が、狩野派に対して公式に発注したものと考えられるとともに、制作年代も一六五〇年前後の瑞龍寺造営の時期と考えて間違いのないことから、守景の作風展開を考える上で極めて重要な手がかりを与えてくれます。

続いての足跡は、それから約二十年後の延宝年間に加賀藩の家老職今枝、小幡の両家と家柄町人片岡孫兵衛の家に寄宿して、六年間滞在したと伝えられていることです。金沢に来たきっかけは、狩野探幽の門を離れたことによると考えられます。そしてこの金沢滞在中に、今回一部を展示する一連の「四季耕作図」の制作をとおして、漢から和への画風転換が図られるとともに、国宝の「夕顔棚納涼図」をはじめとする名作の数々が誕生したと考えられます。

金沢で守景の画業が大成したのは、この地の文化風土によるものでしょう。今回は重要文化財、県指定文化財そして個人蔵の三つの「四季耕作図」を並べて展示します。これらの比較をとおして、守景の画風がどのように転換していったのか。またその根底にはどのような思想があったのか、検証する好機といえます。

四季耕作図部分(右隻) 久隅守景



笹に兔図 久隅守景



常設展示室(第2展示室)

特集

# 春の優品選

4月25日(金)~5月25日(日)後期

常設展示室 第3展示室)

特集

# 鴨居 玲

4月25日(金)~5月25日(日)



酔っぱらいや廃兵、しわに埋もれた老婆など、醜怪ともいえる姿がいつしか心あたたく、高貴にすら思えてくる鴨居の作品群。「いのちとは何か、人生とは何か」を問ひかけ、観るものに自問自答を強いる絵はそうあるものではありません。しかし、それが大変な魅力となっているところに、鴨居の絵の不思議さがあります。

鴨居玲は昭和三年新聞社の主筆として活躍した鴨居悠の次男として金沢で生まれ、画家を志して創設まもない金沢美術工芸専門学校(現金沢美術工芸大学)に入学、そこで宮本三郎に師事し、早くから才能を開花させました。ところが順風であるはずの画業にあきたらず、悩み苦しんで中南米を放浪し、帰国後安井賞を受賞してからもまた悩み、そしてスペインに旅立つのです。

この起伏の激しい生き方は、劇中の一場面をとらえたかのような鴨居の絵とオーバラップいたします。絵が物語としても読める。そこに鴨居の絵の魅力を感じていらつしやる方も多いと思います。

今回の特集では、鴨居がごく初期の頃に描き、あまり紹介されることのなかったシュール時代の大作をはじめとする油彩・デッサン二十二点に、繰り返しモチーフとした人形や靴、愛用のイーゼルやパレットなど、鴨居をしのぶ遺品を含めて展示いたします。

主な展示作品

- トランプ 昭和43(1968)
- 教会 昭和44(1969)
- 望郷を歌う 昭和56(1981)
- 1982年私 昭和57(1982)
- 蜘蛛の糸 昭和57(1982)
- 肖像 昭和60(1985)

前田育徳会展示室

特集 春の優品選

四季花鳥図屏風

鷹狩図絵巻(夏)

真鳥羽入箆筒

●色絵雉香炉

色絵雌雉香炉

古九谷

色絵鳳凰図平鉢

青手樹木図平鉢

特集 春の優品選

笹に兔図 蓮に翡翠図

四季耕作図

猿廻し図

●第1展示室

●第2展示室

●第3・4展示室(油彩画・彫塑・造形)

●第5展示室(工芸)

●第6展示室(日本画)

伝雪舟

六代梅田九栄

清水九兵衛

野々村仁清

野々村仁清

野々村仁清

久隅守景

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料		高校生以下は 無料	

観覧料

夢想

街

飛鳥をとめ

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●

●



飛鳥をとめ 安田鞞彦



樹間に遊ぶ 二代浅蔵五十吉

常設展示室

## 主な展示作品

4月25日(金)~5月25日(日)

●=国宝 =重要文化財  
=石川県指定文化財



## 鳥と語る 詩魂の画家 脇田和展

配色について考えると、補色という言葉が思い浮かびます。赤なら緑、黄なら紫が補色にあたるのですが、たとえば、赤をじっと見ていて、パッと白壁などに視線を移すと、補色の色、この場合は緑が残像として白の中に浮かびます。ですから、赤と緑が近接している場合、それぞれの残像が、実際の色に加味されて、コントラストが強調されることになるのです。よく言われる、色を強調したければ補色を使えというのは、生理学的にも適っていることなのです。

色鮮やかに感じられる作品には、この補色をつまく使ったものが確かに見つけられるのですが、色鮮やかだけが色彩ゆたかというわけではないこと、これは配色の妙というべきなのでしょうが、それを今回の脇田和展は実感させてくれました。

脇田先生の作品には、強烈な色彩が用いられることはまずありませんし、補色による対比なども感じられません。色はいずれも淡くすみ、じわじわと周囲に滲んでいきます。同系色、それも黄褐色系という地味な色味が多いのですが、それが実に不思議、豊穣な色彩空間を感じさせてくれるのです。

色鮮やかに、色彩豊富にと強い色に強い色を掛け合わせて、かえって弱くしてしまうのは、喧嘩の中で叫ぶようなものです。静かな語り口でしみじみと聞かせる脇田芸術は、微妙な色彩による移調にこそ、色彩美はあるのだと語っているようです。

洗練された配色の手本を見るような作品群でした。今回脇田先生の作品を、これだけまとまって展示するのは本県では初めてのことでした。そして代表作

を網羅した大回顧展というのも、昭和六十一年に神奈川県立近代美術館と群馬県立近代美術館で開かれて以来のことでしたので、十七年ぶりとなります。

それだけに、脇田ファンの方々にとっては、待ち遠しく、貴重な機会だったのではないのでしょうか。何足も足を運ばれて熱心にご覧になっていた方々を目にしました。

しかし、一月、ことに雪が断続的に続いた今年の一月は、美術館に足を運ぶことに困難を感じられた方も多かったと思います。軽井沢にある脇田美術館の冬季休館に際して作品をお借りし、また他館の名品を網羅して開催したのですが、もっと多くの方々にご覧いただける時期を得ることができればと、この点が申し訳なく、また残念に思うところです。

しかし、本展を契機に脇田先生の作品を収蔵することも適いましたので、今後、折々に、常設展示室でご覧いただき、ぜひとも洗練された色彩美を堪能していただければと思う次第です。

(二木伸一郎 学芸専門員)



脇田展会場

## 美術館小史・余話

33

嶋崎 丞 すずむ 当館館長

昭和四十八年二月、県に対して「新美術館建設について」の陳情があり、その後とんとん拍子で事が運んだかという決してそうではなかった。受けてたつ県側にしても、現に存在する石川県美術館との絡みをどうするか、どの様な規模や内容の美術館を造るか、どこに建設すべきかなど、大いに検討すべきことが多々あり、そうこうしている間に二三年の月日があっという間に経ってしまった。

こうした県側の動向に対し、再度石川県美術文化協会をはじめとする各種団体から、こんどは「石川近代美術館建設促進に関する要望書」が提出されてきた。最初の要望書と五十年代に入ってから要望書を見くらべてみると、新美術館が近代美術館へと名称が変わっていることが注目を引く。そこで私共内部でそのことについていろいろと検討してみると、要望書にいう近代美術館とは近代美術を対象とするミュージアムとしての美術館ではなく、作家団体の公募展が開催できる貸し会場を造って欲しい、ということであることがわかった。

いわゆる昭和五十年代の美術館ブームに乗って建設された各地の美術館を見てみても、ギャラリー単独で美術館を建設しているところはほとんどない。石川県の美術作家活動は、他県にくらべて盛んなものがあるとはいうものの、果たして年中展覧会を開催するほどの稼働率があるかどうか、こうしたことが議論の対象となった。私共美術館の職員としても、旧石川県美術館の施設規模では不十分であり、結果としてミュージアムオプアートの常設部分と、企画展と貸し展示とを併行して実施できるギャラリー部分を併せ持つ美術館を造ろうということになった。

## 新美術館建設に向けての動き

## 講演会報告

## 戦国武将と茶の湯

講師 嶋崎 丞すけむら（当館館長）

応仁の乱以降の戦乱の世では、力のあるものが政権の座を握ることが可能な時代、いわゆる下克上の時代がやってくるのですが、その完成が秀吉の時代であり、秀吉の死後、徳川家康が天下統一を図り、江戸幕府が開かれます。それまでを広義の戦国時代といえます。この戦国時代を生きた武将は大きく二種類に分けられます。前者は室町時代からの歴史的家柄を誇る守護大名（現在の奥州）と、たえばこの地言えば七尾の畠山氏です。後者は下克上の時代に登場してきた織田信長や豊臣秀吉です。

茶を喫することは本来は薬として、また覚醒の効用から禅宗寺院で始まり、それが武家を中心に広まり、闘茶・寄合茶がたしなまれるようになりました。室町時代には、足利義満が、ばさらの象徴ともいえる金閣寺で寄合茶を催しています。日明貿易の発展に伴って、多くの唐物が輸入されるようになりますが、それがお茶会に所狭しと氾濫するように飾り立てられて使用されます。そうすると、その唐物の価値基準を決定することが必要となり、その役目をするための鑑定家として阿弥衆（同朋衆）が登場します。次の足利義政は、銀閣寺で悠々自適の生活を営み、わびさびともいえる境地を生み出します。この時代に阿弥衆が幕府の役職となります。阿弥衆によって記された「君台観左右帳記」は、唐物鑑定の手引書であり、書院台子の茶の湯の技法や書院座敷飾りの基本書ですが、ここに登場する唐物が東山御物です。各地の守護大名はこのような中央の影響を受け、唐物趣味が波及し収集が始まります。能登七尾の畠山氏は、室町幕府の管領家である河内畠山氏の庶流であり、代々風雅の道に遊んだ家柄で

すが、わけても七代義総は幅広い教養を身につけていました。ことに和歌や連歌に親しみ、源氏物語・伊勢物語・古今集などの王朝古典文学に心を寄せた。戦国時代を代表する武家文化人でした。また、冷泉家などの都の文化人たちが訪れることで、さらに七尾の地に文化が育まれたようです。京都東福寺の彭叔守仙も数回訪れているということが畠山の記録に残っています。それによれば、山城である七尾城の周辺は、四方を山々に囲まれ、樹木が立ち並び、谷川のせせらぎが聞こえ、まことに世間を逃れて隠棲するにはふさわしい所で、その絶境に感嘆したといえます。そこで茶をいただく、その使われた茶は手治茶で二度びつくり、またその際使用された茶の湯道具のすばらしさに三度びつくりしたといえます。そこでは唐物を中心とした珍しい茶器がたくさん使用されていたのです。遠路京都から訪れた彭叔の旅情は大いに慰められたそうです。その呈茶の人物が丸山梅雪という人であったということが、国学院大学名誉教授の米原正義氏の調査研究でわかってきたのです。梅雪は三条西実隆について和歌の世界を学んでおり、義総の時代には連歌が盛んでしたが、この茶人であり文化人である梅雪が京文化との交流の役割を果たしていたのではないかと思われまます。森田柿園が編纂した「加越能古文叢」のなかに加越能の名物茶器目録があります。これを見ますと畠山氏は葉茶壺、肩衝茶入、牧溪の絵、天目茶碗などを所持しており、その周辺の武将たちも同レベルのものを所持していることがわかるのです。戦乱に明け暮れていた時代に、当時の文化人たちが都から逃避した一つの拠点が七尾の畠山氏であったのではないかとこのことを示しています。このように、当時の畠山文化は、つい地元である我々は忘れがちなのですが、京文化と肩を並べるほど活発な文化活動が営まれていたことが再認識されるのです。

戦国武将にとって茶の湯とは、乱世を行きぬくための心の慰みであり、一方では、密談の場でもありました。しかしなんと言っても権威の象徴でした。殊に唐物茶入が、武将としての権威を象徴するものとしての役割を担っていたのです。たとえば「初花肩衝茶入」の変遷をみますと、足利義政 織田信長 徳川家康 豊臣秀吉 家康 徳川綱吉（柳宮御物）というように、その茶入を所有していた武将の位置付けにふさわしい人物を渡り歩いていきます。

信長の茶の湯の功績は、権威の象徴として位置付けたことです。信長は「茶湯政道」という規定を設けたのです。これは武家社会の中で信長に対して功績・業績を上げた者に、茶の湯の許可を与えるという枠組みの制定ですが、このことが茶の湯を盛んにしていくきっかけとなったのです。また信長は名物茶器の収集にわゆる、名物狩りを行います。これは足利歴代将軍が所有していた東山御物を所有するものは、天下を統一した権力者にふさわしい人物であるという考え方を実践したのです。「東山御物の再所有者は俺だ、名物というものは権力者の持ち物である」という伝統を引き継ぐ者は、俺以外にあつてはならない」という信長の論理です。堺や京の町衆から名物狩りをし、一方、信長の名物収集を知り献上する人々も出てきます。こうして収集した名物を、信長は自らの権威の象徴として茶会で披露し、また家来に戦功報奨として与えることで、その武将は一国一城の知行以上の名譽と地位を得たこととなります。このように武家社会に政策的に茶の湯を導入することで、武将が茶の湯におおに関心を持つこととなり、その一つの頂点が秀吉や利家の時代といえます。利家の場合を見ますと、唐物収集に目を向け始めたのは、天正十一年の金沢城入城以後と思われる。家康から与えられた玉潤の「洞庭秋月」、秀吉から与えられた「富士茄子茶入」など超一流の物を所有しましたが、他の戦国武将の収集から見ると積極的に収集するという意識は比較的少なかったように思われます。このように茶の湯と武将のかかわりは、ほかならぬ名物狩りを行った信長の功績であり、それを完成したのが秀吉、そしてそれを展開していったのが江戸時代初期の近世大名の書院茶を中心とする茶会にながって行くのではなからうかと思えます。

（利家とまつ 加賀百万石物語展「にちなん」で、昨年九月二十九日にホールで行った講演内容を、要約したものです。）

## 企画展示室

### 第33回日彫北陸展

五月二十九日(木)～六月二日(月)

(第7～9展示室)

日本彫刻会は、清新にして健全なる芸術の振興を期し、公募による日彫展を開催し、一貫して新人の育成と造形芸術の向上に力を尽くしています。

本展は、四月に東京都美術館で開催した第33回日彫展の作品から、芸術院会員をはじめ日彫会役員の秀作受賞作を中心とする基本作品五十八点と、石川・富山在住の会員、一般の地元作品三十八点、計九十六点を選び展示します。

雨宮淳(芸術院会員・理事長)の「寧」など、我が国を代表する作品がそろい、地元では、得能節朗(北陸日彫会長)の「祈り」、西望賞を受賞した田畑功(富山)の「夢想」などを公開します。

入場料

一般五〇〇円 大高生三〇〇円 中小生一〇〇円

(前売・団体は各一〇〇円引き)

石川県立美術館友の会会員は、受付で会員証を提示されると団体料金になります。

連絡先 金沢市弥生二 一六 二一八 得能節朗  
☎〇七六 二四二 七五五四

## 貸出中の所蔵品

重美・県文 沢庵和尚像 自画像 沢庵宗彭筆  
月に波芦図 山田道安筆

計二点

展覧会 「武蔵 武人画家と剣豪の世界展」

会期 四月十一日(金)～五月二十五日(日)

会場 江戸東京博物館

人麻呂画像

計一点

展覧会 「探訪 いしかわの歌仙絵額」

会期 四月十九日(土)～五月二十五日(日)

会場 石川県立歴史博物館

## 各地の展覧会

### 五月

開催日程 休館日、内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

サム・フランシス展 5/25まで

東京都現代美術館(東京都江東区・〇三 五四五 四一一)

春季特別展 女性と仏教 5/25まで

奈良国立博物館(奈良市・〇七四二 二二 七七七)

秋野不矩展 創造の軌跡 6/8まで

兵庫県立美術館(神戸市・〇七八 二六一 〇九〇)

三代藍堂・宮田宏平展 6/15まで

蠟型鍍金 終わりのない物語

新潟県立近代美術館(長岡市・〇二五八 二八 四一一)

## 次回の展覧会

特集 甲冑と陣羽織 (前田育徳会展示室)

五月二十九日(木)～六月二十二日(日)

特集 古九谷・再興丸谷 (第2展示室)

特別陳列 戦後工芸の展開(3) 石川の昭和40年代 (第5展示室)

五月二十九日(木)～七月十三日(日)

## 五月の行事案内

《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月日	行事	内容	会場
5/4(日)	CDコンサート	20世紀の名指揮者 カール・ベーム 2 ブラーム交響曲第1番ほか(約70分) 演奏 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団	ホール
5/10(土)	土曜講座	仏像44 醍醐寺のほとけ	講義室
5/11(日)	月例映画会	明治の絵画(22分) 絵巻(28分)	ホール
5/17(土)	土曜講座	日本画について	講義室
5/18(日)	記念講座	国際博物館の日記念行事・開館20周年記念連続講座 美術館よもやま話 国宝雉香炉と石川県立美術館	ホール
5/24(土)	土曜講座	飄逸の画家 久隅守景の画業	講義室
5/25(日)	月例映画会	前田青邨と日本画の流れ(29分) 宗達・空間の魔術師(23分)	ホール
5/31(土)	土曜講座	戦後工芸の展開(3) 石川の昭和40年代	講義室

五月の全館休館日は二十六日(月)～二十八日(水)です。

## 人事異動

今年度の当館人事異動は次の通りです。

転入

総務課 萩原正憲(石川中央福祉センターより)

普及課

学芸員 吉村尚子(金石中学校より)

転出

総務課

課主幹 山本信幸(金沢県税事務所へ)

普及課

課長 末吉守人(津幡町立奈南小学校へ)

新規採用

総務課

嘱託 津田 喬 岡本千春

臨時

須广佐也加 岩本真希子 宮内奈々

退職

総務課 芝田公一 平山香織 手塚悦子 野村純子

臨時

沖津 愛



か りょうびん が ほうそう げ もんまき え きょうばこ  
迦陵頻伽宝相華文蒔絵経箱

松田権六

明治29年(1896)~昭和61年(1986)

昭和40年 1965

幅32.5 奥行14.5 高10.3(cm)

作者松田権六は、明治二十九年金沢市に生まれました。兄孝作について蒔絵を修行し、石川県立工業学校漆工科を経て、大正八年東京美術学校漆工科を卒業しました。金沢の五十嵐派をはじめとして、江戸時代から伝わる各流派の蒔絵技法を幅広く学び、また朝鮮半島楽浪遺物の調査や、日本及び中国の漆芸古典作品を深く究め、それらを総合した格調の高い作風を築きました。昭和二十二年には日本芸術院会員となり、三十年に重要無形文化財保持者に認定され、さらに五十一年に文化勲章を受章するなど、漆芸のみならず昭和期を代表する美術作家の一人として知られています。加えて、正倉院宝物をはじめとする多くの文化財調査ならびに修理にたずさわり、また東京芸術大学や石川県輪島漆芸技術研修所などで後進の指導にもあたるなど、その活動の足跡は多方面にわたっています。

本作品は数ある松田作品には珍しい経箱で、熱心な仏教信者である某氏の依頼によったもので、直筆による原寸の木地仕様書も確認されていることから、作品の設計時における作者の指示が明確にわかがる点でも貴重な作品です。なお、寸法指示は尺貫法で記入されているため、現在のセンチ単位での採寸では割り切れない点も、尺貫法で見ると当然の事とは言え、合理的な数字の積み上げとなっていることが納得できます。

その仕様書の記述の中で興味深いのは、「甲板表の平面部の周囲二厘ばかり削って僅少の甲盛とする」という具体的な指示がある一方、「木地の板厚は素人の考えで断面図の如きものをやって見たが適当に処理してよるしい」という木地の実制作者に裁量の余地を与えている点です。自ら推敲し良しとしたものよりさらに良いものが出来るのなら受け入れようという、柔軟で合理的な精神の持ち主であったことがうかがえます。

さて、経文を納める経箱という用途が特定されていることから、主題は浄土で奏樂する半人半獣の迦陵頻伽が選ばれています。その天空に浮かぶ姿と気品にみちた顔立ちや、蒔絵の世界にとどまらない、普遍的な絵画空間を見事に現出していると言えましょう。そして強い光輪を背に天空に舞う迦陵頻伽をつなげる宝相華唐草文や冠鳥の流麗さ、さらに散花を思わせる小さい花々も蓋表ではわずかでしかありませんが、実は蓋を開くと身内部の外側面にも描かれており、その意匠構成の展開の妙には驚くばかりです。

ミュージアムショップ通信



オリジナルクリアファイル(各300円)

の会員証と同じですね。お揃いでいかがですか?の2種類があります。雑多になりがちな書類の整理に大変便利です。ショップ入り口で皆様をお待ちしております。

桜のシーズンはもう終わりましたが、野球のシーズンは今からが見頃です。米大リーグでは、石川県民が誇る松井秀喜選手の活躍する姿が連日報道されています。ヤンキースのチーム内でも大型新人として期待されているようです。この調子で5番打者として、いえ、将来は4番打者としてがんばって欲しいものです。さて、今月紹介する商品は、我がショップ期待のルーキー、「オリジナルクリアファイル」を紹介しましょう!。売れ筋ランキングで言えば、満塁ホームランとまではいきませんがコンスタントにヒットを飛ばす人気商品です。価格も300円とかなりお手頃。図柄は「青手桜花散文平鉢古九谷」と、「色変鶴菱文唐織」(こちらは今年度の

開館20周年記念連続講座のお知らせ

当館館長による連続講座が始まります。第一回目は「国際博物館の日」に行われます。講座は十回行う予定です。演題等は各月の行事案内(7ページ)に掲載します。是非ご来場ください。

休館日

五月二十六日(月)~二十八日(水)

石川県立美術館だより

第一二二五号 平成十五年五月一日発行

〒九二〇 〇九六三 金沢市出羽町二番一号

TEL 〇七六(一三三)七五八〇

FAX 〇七六(二三四)九五五〇